02
不定期発行

教会専門デザイナーが考える、教会におけるデザインの重要性と役割

デザインと、キリスト信仰

No.02 キリスト者の名刺～『あなた』にとっての『私』は誰か～

発行年月日／2016年12月20日　発行人／吉田伊織　編集・デザイン／MOTSUデザイン

筆者　吉田 伊織
MOTSUデザイン 代表
日本バプテスト宣教団　知多のぞみキリスト教会所属。広告代理店を退職後、教会専門デザイナーとしてMOTSUを開業。教会学校教材などを開発・配布・販売するSOM（ソム）ミニストリーズの代表でもある。

名刺の役割は、『名前の暗記』ではない？

私が過去にもらった名刺は、一通りファイリングされている。印刷会社や車の修理工、家電量販店の販売員、カウンセラーまで肩書きは多様だ。その殆どの名刺は一目見れば職種が分かり、どんな場面で会ったか、あるいは何をしてもらったのかをすぐに思い出せる。しかし、中には「果たしてこれは誰だろうか」と首を傾げる『謎の名刺』がある。聞き覚えの無い事業名、抽象的な肩書や紹介文、間に合わせでこしらえたようなデザイン。いつどこでもらったのかすら思い出せない名刺だ。一体この名刺の持ち主は、どんな目的で私に名刺を渡したのだろうか？私にとって彼は、名前だけは辛うじて分かる『謎の人物』なのである。この経験が語ることは、名刺は名前を暗記させることが目的ではないということだ。名刺は名札ではないのだ。では、名刺の役割とは一体何だろうか？

私は名刺の役割は、『相手にとって自分はどういう存在であるかを伝えること』であると思う。大工の名刺であれば家を建てて欲しい人に対して、『あなたの家を建てる事が出来る人物である』という事を伝えるというのが役割であろう。ところで、あなたが今持っている名刺は、誰に何を伝える名刺であろうか？

相手にとって『自分は誰か』を説明する

実は、私達キリスト者も名刺の肩書や紹介文の書き方次第では、先ほどのような『謎の人物』になってしまう恐れがある。というのもキリスト教になじみの無い人にとっては『牧師』『宣教師』あるいは『長老』といった肩書は、存在理由のいまいちわからない職種の一つだからだ。もちろん、キリスト教を教える人、勧誘する人といった漠然とした印象はあるかもしれないが、「自分とは関係のない、自分には必要ない存在である」と思う人が大半ではないだろうか。必要性を見いだす事ができなければ、私達の名刺は『謎の名刺』、あるいは『不要の名刺』として処理され、次のステップへはつながらないのだ。仮にもし、名刺が受けとった人が「個人的な相談に乗ってほしいが、牧師は相談を受けてくれないだろう」と考えていたらどうだろうか。私たちは大きなチャンスをふいにしてしまう事になるのだ。

一般に馴染みのない職業は、丁寧な説明書きが必要！

だから私達は、名刺に記載する情報について、今一度考えてみる必要がある。私は、この人（名刺を渡す相手）にとって、どのような存在であろうか？そして私は、名刺に一体何を書くべきだろうかと。

MOTSUの答え 『パウロの名刺』～私はあなたに、何が出来るのか～

私が『名刺に何を書くか』を考える上で大切にしていることは、『自分本位で書かない』ということだ。自分の使命や働きについて書きたい人も多いと思うが、私はそれを名刺に書く必要はないように思う。自分の使命は自分が分かっていれば十分だし、ただでさえ名刺はスペースに限りがあるのだ。私は今まで「営業ノルマを達成したい」と書いてある営業マンの名刺を見た事はない。多くの人にとって関心があるのは、熱意や想いよりも、「この人は『何を』してくれるのか」ということだ。「人間関係の悩み相談には乗ってくれるのか」「英語を教えてくれるのか」。『お気軽にご相談ください』といったほんの一文であっても、相手が受け取る印象は大きく変わるものだ。

そして同時に大切なのは、「私達は、この人にとっての誰になれるか？」「この人に対して何ができるか」※1 を考え、自分の役割を自分自身に問うことである。自分の役割を問う上で、最高のモデルがパウロであろう。私の想像だが、もしパウロがこの時代に生きていたなら、彼は肩書きの異なった何種類もの名刺を使い分けて伝道していたと思う。パウロはその書簡や使徒行伝の中で、ユダヤ人やローマ人、ギリシャ人などの人種や職種、その場面に合わせて自己紹介を変えている。「律法を持たない人の前では、律法を持たない人のようになった」と彼自身が証言している通りだ。彼はあらゆる人の立場になって考え、あらゆる人の隣人となれた。かといって、彼の自己認識があやふやだったわけではない。彼は『異邦人伝道』という自らの使命を確信していた。だからこそ、彼は自分を自在に変化させられたのだと思う。パウロがエリート階級と面会するときは自分の学歴を記載したかもしれない。職人と会うときは、高学歴である事は伏せ、幕屋職人という肩書きの名刺を渡したのかもしれない。『私はすべての人にすべてのものとなった』※2 との言葉の中に、肩書にこだわらない彼の自由さが現れているように思う。大切なのは相手の立場になって、自分の役割を発見し、それを名刺に表現していくことだ。

デザインされた名刺の利点 『名刺と働きに自信が持てる』

名刺においてデザイン性が優れているということは、大きな利点がある。それは自分の名刺を好きになるということだ。名刺が好きになれば、自信をもって名刺を渡せる。同時に、名刺に自信を持つことは自分の働きに自信を持つことにもつながると思う。私達は自分の働きに自信を持っているだろうか？

最近、自宅に乳飲料のセールスの女性が尋ねてきた。新入社員であろう彼女は玄関先で近所の営業所から来た事を告げた後、このように付け加えた。「上司に営業に行ってこいと言われまして…」。むろん私にとって面識のない上司の命令で来たという情報は、私が製品を購入する動機にはならない。私にとって興味があるのは、その製品（サービス）がどれだけ良いかという事である。もし彼女が、その製品の素晴らしさを自身の体験をもって語るなら、私は商品を購入し、「なんてすばらしい商品を紹介してくれたんだ」と、彼女に感謝したことだろう。

私達キリスト者は『福音という最高のサービスを提供できる』存在なのだ。「誰も私の名刺なんて欲しくない」と思っている人がいるならば、それは誤解だ。この素晴らしい福音を欲しくてたまらない人は至る所にいるのだ。そして、福音のすばらしさに裏付けされた私たちは自信と期待をもって、名刺を渡せるのだ。

この度、名刺ファイルを見返してみて思うことがある。今までもらった名刺の中で、私の人生に『本当に必要だった名刺』はあったのだろうか？ＰＣの修理、保険会社、不動産関係…、これらは一時的には役だったかもしれないがその中に、私の魂の救い、永遠の命に対して影響を与えたものではなかった。しかし、そのファイルの中にはきらりと光って見える、いくつかの名刺がある。未信者であったときにもらった、クリスチャンからの名刺だ。彼らは、私を永遠の命へと導いてくれた。私にとっての名刺は『永遠の命という最高のサービス』を紹介できるすばらしいツールだ。クリスチャンである一人一人が、いつでもどこでもこの名刺を携え、私達が紹介できる希望について説明できる姿勢を持っていること、それが現代に生きる私達の努めであると思うのだ。※3

※1 第一コリント人への手紙９章19節 ※2 第一コリント人への手紙９章22節 ※第一ペテロの手紙３章15節 を参照

Light up! MOTSUデザイン
MOTSU デザイン　〒478 - 0051　愛知県知多市朝倉町 91 石川ハイツ 203
Mail : motsudesign@gmail.com　代表：吉田 伊織　090-3584-1754